西遊記

一

ル 3
322
1

西遊

門 3 號 322 巻 1

壹の巻目録

一 檜垣女
一 牛の生皮
一 榎本の大蛇
一 楮の椙倉の大蛇
一 琵琶の妙手
一 しらぬ火
一 檍馬
一 石敢當

弐の巻

一 冷眼王
一 孔明の陳を敷
一 叙聖の風穴
一 廉耕夫婦対面
一 鼉龍
一 十六日櫻
一 魂祭り
一 渡り鴿
一 猘犬

三の巻

一 長江の旅泊
一 山女
一 求麻川
一 龍門の瀧
一 山童
一 狨猬

一足島　一麝香鼠　一壽夭
一神樂　一いろは

四の巻

一篤實　一仙人　一老の行
一流人　一阿蘇山　一仁斯至

五の巻

一天の逆鉾　一目鏡ん橋　一家豬
一地獄　一東海氏の墓　一清正公
一山汐　一与謝ら瀬　一景清の母
一卑子　一續亂究

目録終

西遊記巻之壱

檜垣女

南谿子著

天明癸卯の春肥後國岩戸の観音の巌窟の中に式人形ありしの事ありて又五百羅漢を石にて彫刻して安置しけるかゆへく殿親しで松窟の額をあらせしかと人をもりしめつゞくやまくをいづけて道の為き成たのる緑へ行きと謂ども谷ま入もそ縄をとて山の峯より綱り下して幸くして額をかさり書をしるすかあらりし一所みりてうかりしたまいはみしくてありしくさりその鳥を誰けしろうとくりうて人を集め聞きてみるに肉に一重は石違なりし盡に檜垣女

形自然に六字を彫付たり 蓋し和らかなる所へ小き像をきざみつく
り像を陶器の中に入れて見るにまことに面白く唐土の跡
ずとて熊本の宮府にもて寄りまゐらせ時習館にわたしぬ
館の学士打集りて玉函の式志紀 因て像を摹写し石に彫付
紙に写して持帰らんとてもとめしに其事とも熊本にありし
人々より此物語をかの侍りしかば誠に嬉しきとて得たく都に帰りと
ぞそもそもなりぬ此檜垣の女といふは名高くして諸書にも見えたり後
撰集十七巻に筑紫の白川といふ所に住侍りける大貳藤原
興範朝臣のまかりわたるついでに水たべんとてたちよりて
乞ければ水をもて出てよみ侍りける

年ふれば我黒髪も白川のみづはくむまで老にけるかな

又拾遺集夫木集第弐巻に檜垣が家の集を載たり又大和物語
に純友が騒の使に大貳小野好古下りて檜垣の女が家の
ありし所を尋ぬれどあとかたもなかりしと見えたり又
謡曲にもこれを作れり筑前の太宰府に檜垣の庵ありしが白川のほとりに住
し白拍子後に移りて此白川に住しなりと見え
つまり檜垣の女はまことに賤しき白拍子なりしも風雅
に長じ一世に名を顕し数千載の後を聞て如く人跡絶た
る所に其像とてつくり造りて筑紫の古き文史なとおもふも呑
そうする志ありけり興範好古の何かれと言はなかりし

をあらす

牛の生皮

康兒鳴に遊びける比みぶつせし罪人ありけり城下と云る
ところに至る紀田の辺に百姓何某といへる者總して深く愚かなりしが
ある時何者かのいひけん牛の生皮は價高しときくことのありけると
て親しき友壱人かたらひて牛をいきながらに皮を剥取り
ねまゐらせしに偽りて生きながら剥終りて其皮を壹歩
もと稼ぎの重宝になるとのにあらはれとて誰も買求むる人もなく
ありし此の村役人此事を聞つけ心根の悪きなりとて
くして城下へ訴へ城主ことを聞てふかくにくませ給ひて或人其

に獄屋に入れられし後法のごとく刑をくはへられけり仁政會
獣に及ぶべきものなるべし世の人生の字を心得違ひてようち
のりく狐狸犬猫などをいけながら人まくといひて膽をとる
などといへりあるひは上をと云妙薬の中にとくもちい折節
は心得たる悪人ありて禽獣の腹をひきさき割破りて苦痛
をあたゆるひは膽をとりて此ふるもみなりといへども
あるべきなる事とて近江の藤樹先生と君へ云のひし
事ありし生膽の生は生鯛生栗などといへる生と同じ事なりて十
かくひざりのを生て生栗を書きて栗は乾によいき
らるは人らず生をなまとよむべしと云ゐいささか

八疊の字を書なり豎書のごとくに蟾酥など取たり八疊蟾と
書たる右の野人にかくとひて此蛇をしめんとしけるにござハ
ひハあらざりけりと從

榎木化大蛇

肥後の国求麻郡の御城下に自町といふ所に知足軒といふ
小菴ありて菴の裏にあるハ求麻川なりて川端に大なる
榎木あり地より上三尺ばかりの所二またに成りけるをきま
これ皆より根に成りあへて其中に大蛇をあり時々此
榎木のまたに出るを城下の人ゝ見る事見及べり其と見合
すまじ病む事あるとて此木の下を通りける人頭を出されく

出る虫の事なり物さき長さ一丈ばかりあつく魚の色白く長さ
八疊ほど三丈餘ありともいふ八丈の足のみなきとて又草に
よく似たりとて下の者先を毒守蛇と云者より人錢害
する事八百年ともいへども手に無数の榎木此下に入りてなりけるから
あしくかやがて後にあしくぞやらひにあたりけり

猪の狩倉の大蛇

是を守る猪の前に其事なりし求麻乃城下より六里ばかり
足離れて猪の狩倉といふ所あり此所の百姓或人山深く木
こりに入りしにきつねを尋ね捕とりて其さ八九丈そ
ありける大蛇の其かまへる所よりまへを追て来るので

まけべうをあらきまへ武人ともにもちゆべし本なる胆力
とらく金銭をきうる小御しふ佳かふ大蛇を打殺しぬおの事
予が幼麻にいとりし頃がて事ほせの頃すもハ本の打殺
せし所れいいまう骨ゝ朽ちう鱗をとゝめ居られしい
まゝりてなんと幼麻の本草綱目の蚺蛇の條ひらと
ちや蚺蛇膽は腐ちぬべし骨はこれあるを薬となし是をもら
れたるの蚺蛇ハ此追なく生えかりくるすとゝて等閑にせ
るしぬ此蛇と接木の蛇と同種なるべし如く細く大なる蛇
とありとのこと
蚺蛇膽蚺蛇骨皆医家の珍重する奇薬なり予が以つくせしこと

小き真物となるかをもれもはなきハ撥骨ともにぬきてた
用とせしなり今の世にておきと人ハ揺り出てとぬてある
つわるを波死の人と此よう見ず残しがうゝるふてされ
小児あれて予とあるう珍奇のるゐとをとひ訪ふて業案する打
るもしなうくもしとおう多きなりぬ

琵琶の妙手

部の琵琶は只平家物語をうたふにも声の調子はからしすも
先の琵琶とも周の又雅楽の琵琶は音敏にあれしくて平家は撥
るのみなり律を糸のるのすまにいきうちともいかへし只式
二様あまることてはなふ人稀にして感する人と又稀なり俗

間には絶て無し。九州には琵琶法師といふものゝ瞽者ありて琵琶を弾じ路頭に立て軍物語をかたり、又は律に合せずしくして唯其場に合すのみ。又琵琶ハ地神経をひく三味線法師などのいやしき者なれば、いふべき事のにあらず。されどたこうなしいひのゝしりて竈猿するもあり。薩摩大隅の二国のみともかくもあれ、此二国ならでは他国にはなし。大小異なり其形と平家琵琶にくらぶれば少し大きく、撥ハ黄楊木にて作り其大きさして扇をひろげたるごとし。年若き武士皆琵琶をとりて稽古す。彼二州は名たる勇猛の風あれば、すさびがくありさま太刀を十文字に横たへたる荒武者のこの事なれども、琵琶を弾ずるありさま殊勝

情ありといふべし。其調しくさえて雅にして他国の琵琶とハ似るよしも無し。殊に大隅国にハ池田某といふ人ありて当時第一の名人なりとす。旅にて其月清き夜、人々琵琶を弾ずるに、浦の魚集り来たる事、常のことなりとぞ。或時人ありて彼地に舟して後に比羅邸の浦に泊りとりして其の舟端に出しくなりといひ入れば遠くへ出たるを人も絶しまあるを温泉の湖のこと打ほけれは琵琶の声に魚集り来りしはかんせしめや又ぬめる者はいたしの事かなといふ名器を取おして其の弾せる人なるものなら

みといかず識にいまし、但馬守ときに塩飽の名琵琶くぶ求め
と感ぜしむとかや今の京都の琵琶などひろく〳〵てもてはやし
好ましく親しかりける今日世上の琵琶とふものでありし始めて
其時代感せしと理りなりとえへるに今様の音いひも皆そのまゝ
また京都のむかしの姿に皆此ありけり備はり残りて今にて
古今へつゝ京都はむかしの事なりけるとこそきこゆる事も又
西しもの河に竹生嶋に詣でし時経正の弾かれし琵琶の撥な
りとて見せられしが水牛にて造りけるにはあらで木を三味
線の撥のごとく広き縁に截ちて手に過ぎたりし此世の撥とは
天壌のおち遠なり竹生嶋にあるは後世の偽物なるべしやと

おりふし事をわかちかたくしてさらに捨すへからす。よつて琴の法をもて
指の事は人々にしたかふて凡そ其時の自然雅楽せり。又鷹司殿にありし時森
本朝流の名人の家に招かれ、稚く馳走の上、宝生をいふる法
師、線によせて琵琶と合せらる。走追。又倫。花の香。小町。玉章。似我
墨絵。老冒の森。鶯鷲の声。なとのふうく教へる故に、せんき
うなれ名を雅ふしく玉章とまた古き世しき音の記まてきこ
春の鳥の声の中に囀るかことく谷の清水の岩根にむせふる
似たり。きこへへきやれ冬の嵐に枯れたる枝よ鳴るかことし。末
琵琶とかくすつる平家琵琶なとかへ似たとよし。波白楽天
か琵琶行もしくはそひ合せり。又嵐をいふりのあり。菩薩

おれむかし伊東大友なとく合線の事線るゆて、きらぬとそ
おしく琵琶の手を縁になりそ、しくれのうくとろく指に只る
るりのなうとろつくも先に新しく別なり由もし先のうく詳に見へ
らしく覚へて只京縁にし大変書きつの口れしけ書へ事をき
かふいおかひ調りし京縁本を伝へんと誠りひしくる詳に
其いてしくまやすしくおひ給へてとある神に試り多かりし
をとらすしぬは旅仙雅楽をそらくて別に琵琶行を編線作
りて目記り志々せり又波らこの章をと写して残りぬの
ほりての世の事に知れるん人は波琵琶京縁にを伝へよか
しとおもふのみ

しらぬ火

筑紫の海に出るしらぬ火は毎年七月晦日の夜なり世に
よりて名高き事なれども今は九州の地にても其所を知る人まれなり此夜
八集り来りて見るものなり京都の人にて見たる人まれなり
豊後の中へ行く人ありし京より九州まで下る人ことに多く商
人の数なきにはあらねども京都へ帰る時の頃に来り又下る
時と京都にて盆を過して後下る由にて八月に入りてや
らく九州まで下りて見し此の中へ七月晦日の比を見たる人
の彼地に至りし時居るものゝ事すくなしかゝる奇異の事あれ
ど探りえざりしに京まで帰りて来れば盆後すぐ出立

ありく雲仙が嶽の沼がそれより濁水に出て城下よりの舟に
乗り天草に渡り天草此地獄をいへる山の岸までしらぬ火
と見物せり先濁水まで来てしらぬ火見るにはいかにも此地よりなし
坂やと聞きて肥後宇土の八代松合の遍の浦てより
又能よく見ゆるといへばそれよりは天草
に渡る人もありしと便船頼みに湯島の人まで便船となられれば
まさき船を借りて渡る此日天気晴れしかば
風静かなれば四方此辺の景色よく遥かに見えて
むかふも東南に連なる天草の島々渡りより此海
に高き山の嶺中に深くて高さ六十尋もあるべき程の

る船を操船子なとハかくなる事をよく知り居て漁子の手にかゝれ
ととおとし侍りし八此鯨取りの上を鉾といふかりの綫収て
魚をとらまへる鉾は形絵のごとく鯨は長さ三間先きに鉾をつけて
作りて二つに分れ力へりあまりて先き未尖細なり石ツキは
木にて長き綱綫付けり船頭此鉾をとりて鯨の身中ふか
深く入る鯨は小さきものといへとも至れと突くるなり其大きさ
サスがことし大なる魚は船に来る時ハ此鉾綫投るなり矢を射る
よりも怪なりは鉾を持ちく船より互に立居りしつむか
よの波荒く悪く見ゆる鉤ある鉤をさげて縄は鉾綫投けれ
りしよき魚あく躍ての色行く船此ちる新に波縄をとて

事長く由るし中る船をとゝあやとりてその魚ハ後ひ西紀志へ
らくして静に縄を引寄せまたれ其魚彼鉾の力へりにそむ
ら逃て侍く船をくかつある船鯛鉾の柄を取るまゝに船
此中まを縁上て来へまか廿八九尺余の魚此形細くして口
偏就りしく魚鋭ふくき なりとり不思に似りて平魚のとくあ
とのなかりと鋭口もしの幾き或大六七寸を立ところ末頭く齒
鯨のことく且獣此角のことく魚まるくたきものとかへんへ涙りの
一角の魚吻なりといふと此魚来て縁由りあるり先ろなし
此魚ハ船頭にも此ありしもろり来海老肉を油を取ると云
ふあらり大魚なれハ食用あをなし縁りくうしとりて捕なるとも

きる隔たるのみならず、さらに数里の海上を経てきたりしは並
つくしも此天草は地方は長崎より天草の樵夫山ぶかく海へ出ると
なるにつけても三角といふ所より山の方に船にのりて行くに
右に七町ばかり下りて渚へ出づる山清く風景文作にまさるの小
へぐし南へ向ひて長く、こゝは縁にて清く小松の生ふる景の
左は静かなる行人の住居もしづかに見ゆる所の
方々波打ち際に居て磯の清き事言ふべくもあらず、いといふ
ばかりこゝに船をとゞめて、中にて渚に船よりつけて
ろす船頭らはこゝより漕ぎ寄せいとど情ふかく
すべて浦々に渡し、磯に清く皆も船にて蛸などあるく国

舎の中にも珍しく、ゐなかは京都に住める身には、いと面白く覚えん
り船頭も例の拝打ちて我もて船にのりしが程なく親人は
き鱸などの魚多く捕りて、これを料理して煮る鍋もなくして味
の美なる事いはんかたなし、中にも時様々の魚は船に乗り
でいとさゞなみ起りたる天草の郡をも、我が見たる所にも
おもしろき塩うら多く、漁夫なる此村にもありて、此人の
家は常に肉を食ふといふも百姓も人の常なるに、いたく
事に毛ぬ蓮華座の様なるよし、是もの所の東の海の岸にて
ある山ありて、この七八丁に見渡せば、此あたり西の方に高山な
る此峯より見わたせば、遠く数里をへだてて肥後の国の方まで

是を望に清く見ゆ宇土郡は八かしたに見へたり右に日奈久
印ちま八代まちの海上より七八里にもあまる
南は八の海数十里みちて三浪の見へて案内の人指して
ちかう見ゆる嵐嶋あり大嶋あり権現三ッの嶋あり又八紫嶋
と称しかの田おもて流上三里ばかりよりいとちいさき嶋く
見る事なりがたしといふ津辺に出て之を聞かば嶋々見ゆるあり
りとかや神の燈せる火と人里にまでいひていと物凄き海山なりしら遊
さま知らぬ火見物の人々出来りて数千人に及ぶ皆此を遠
より二百町三百町ほども来りて見物する人々なり積多く漁
の両ども中名懸引御して人数とさぐうる船八而く松

ともありて酒のみを知ずしてなかひしく小小唄浄瑠璃三
琴三絃胡弓などの音楽を尽くし鼓太鼓なども
八ッ頃よりも見物に諸方より集り来るもの数千人にて遠慮
し波座に登りて遊山に連なり備なくむつびくらべるかため
温泉の場の宴のごとし毎年八朔より八朔遠慮を蒙
れきてとせしる海遊の高山に津まで見へ小夜風
物ども酒にまぎれて身ると志ていでち出数
するとなりしと知らぬ火さますら今年とて只見ゆ
今も今宵八いうなる事をしらぬ火を出すゆへ此説八そう
となりやそと云ふにいふ事をありしと居かりしたる八ことを

きある所に遠向ふには波を離れて赤き色の火壱つ燃出して又
火左右に分るゝを見る内に其は又一つ二つ三つとわかれ出て
出る程に海上凡四五里が間に百千の数限なく其明
らかなる事燈をともしたるが如し滅るあり燃るあり高きあり低きあり其際
限りなく見わたして目を驚かせり其火の色は常の火と異にして提灯の
火のことくあかくむらさきなどもありしこの夜人は大抵の天神祭りに酒宴讌集
て見えしは是のみならず実に稀なる事といひあへり余も所の人に皆
かれ年によりて多き少きもありて変るといへども今年は去年に増して其
を多く出づるとぞ予が詠めしはいかにも広き海中に出る事
なれば天草は限らず肥後国よりも八代の浦までも出るといへり

其中間にありけれどもといふ所に見ゆる高山の峰に経
塚などのある所にて其山をもと群集せる事なり此所をは
あるいは此老海中に龍神の燈明を献ずるなりとてあがめ
こゝに漁猟の船を繋がんずる織船をもってかくとは言ひ難き事
なし且又此国の士なる人は小舟に乗りて彼火の近くへ和
れいかなる火なるかと見て大抵に近くなり其我船をくゞる
と見へつかくして終にそこに今も其火の所を見届けていふなり
火といふも誠しき人は此二の人の如く此火をば不知付
定まれることものなると覚へつ唐土にも桃江の神燈などと
是に似たる事もあるとぞ此地の風俗は此如くのこともありとて

九旭あるハ火の光り断々續きて星となりて消滅す
世にしらぬ火の筑紫の國とハ此後の事と名付られてと也人いふる事
なり中古の世火の宮といふ肥前肥後と改られしと也又
和哥にも読まるゝとも古しへ火の筑紫なとよまれたるにて故にかん
人もしらぬ事なりさすに此邦を考へて記しつゝ置なり

権馬

薩摩日州の邊りハ都を遠く離れ古代の風俗も残る事多く
諸家の神社に権馬といふ事あり権馬といふ名目ハ鑑にもなく
凡て古き事を権現といふ事ある事と訓の人に問ふ
此の神事を忘れ此人まる祭りには神社に権馬と云ふもある

とてみな武小荷結る野飼なるを撰数十百匹紅緒の鞍おふ
せ皆しやしてもとより都と切りけハ飯代者馬主共三人程つゝ付添
皆白衣に襷かけ神前に太鼓を打鳴し其馬をと其夜に追まはす
拝殿より拝殿とせる事三遍数十るに至る数百人のかれいの也
がより打ち我先にと一同に押廻る其間神楽を囃す小拳
る太鼓の笛人るの叫び騒ぎして一村に震ふるなり其事繁く
流鏑馬と詠む山中にて古風なる事なり其流鏑馬
競なるなども有しものなりと世上方にも稀なるものなり此辺にも
其所の神社にあり就中日向の宮崎郡下小方村にある神武天
皇の宮にも流鏑馬競ありて最厳重なり其地方七八丁斗本

地にして古松森々と生ひ茂り無数の堂閣なり本堂は中央
は東向にして其外なる堂は八方有の南北は開きて幅十丈六尺
長さ数百間続きたり中より南へ向ひて寄るなり側に九尺
毎七日毎日なり前の方三日より足揃をなす村々より奉目
するは遅速は様々に番々と定む大凡御車馬は凡六十疋
なりなるは上手下手をわかちて大凡りくを書紙となす翻に面白
御はた右に出儀ぬ築上て持を揃へ見物人多くありて目を驚
くり始りて其日は各々遠く歩むその一の馬の出しに
大綱曳て大王の馬の足ぬ招へ都の人も見に来たり後に揃へ無人
を拵へ装束のごとくに出立襷をかけ誠に勇ましげなりける也

寄り人あまた出て大勢人にて口縄ぬきて其先に呼唯を合せて打鳴らし
備所ある八丁程人より勇んでも只綱引々々と呼り
出す綱の人数をくゝるは以下綱ぬ切て一同に綱引を
大王の足前を勘定し無人のうけたる樹木に寄せて鞭しるへと
そよりは皆もそれぞれの為に飽まで飽て調子よくなれば八方に
其一し騒々しく劣る見る無人を出し搦め
事にされば業をせんと励むるは競ひ事と人のこと
十勝すれば又出しはなしの後もあれは足をそ
持ちきると共に以て勝十番まで勝止り打ちとあわ
きくと馳りまはし却ち中途にて勝後まで勝は様をなさ切

またて犬追の中に駈入ることありとも害の当るを知てなり
又弓の力ある者は連て射り継に浅く根多れたるを
馬先きに事に追すかひ横に成は起こりたるを押へ
向て先きへ向る強く押されても横に寄るを諸侯を能く
うとまることなく知見あるゝ犬の自由に走らせて猶も強く来るなり
其人は幾千人斗の武者斗の弓物犬三遍へて大勢六千丈
のなると好より善にありてかしこきも知るべき事を識に馬
上の達者なるをもって人しし又薩州にて犬追物を以て甚能く
射術の武事ありてましく大事とみすゝ御中にも稀なる事にて
て馬の妙に犬追物をは極秘とする事なり甚深なりしと

其祖先島津三郎左衛門尉忠義鎌倉将軍の時犬追物の中に於て犬追物
し例に載りて御当家 大猷院様の上覧の折東武に於て
島津家より犬追物を勤られしより今に至て絶ず其家にて伝へ
のみとすること又牧の荒駒を捕る事あり薪代の見物事之牧
の中に於て其の積数を駆け出し放ち馬数十騎余乗数多人に
方を囲て牧の駒をかりたて捕残の駒に乗り出し騎馬の士
其意す荒駒を乗り御る事之其荒蒿に蒿する牧の駒を追詰
て或は背より鞍に乗りうつりてまた手をとゞまるもあり細引を
打掛けて引倒すもあり首の轡をかけて乗り廻るもあり又
ゆゝしき働き其図ならしき壮観なり其隣伍乃伝へ其牧の外

けり軍陣の縦横にして其上に数多くの事奥にある中にも一あ
りて年久しく月日限極りて居しに上方よりも見物集るところ大概を
手鎖付てありし中にも此比鉄の枚をとりてなどのとおほく此細
のまゝを構へてかくる兵馬個織ともうへ人多くこれなりと
多く柔弱の風に移りたるにて遺せし物なれども今になほり
すこし又かく古風なりしにとありて治世の武を忘れぬ人の教
なりとかくなるなりきことゝ見へたり

石敢當

薩摩の鹿児島城下町々の辻々の町角に辻衛多く有て其傍にいさゝか
三尺斗なる石碑あり石敢當といふ文字を彫付たりといふ

予が唐人にまとふ所の人に問ふに昔より辻々に此の石をおくといへる
ことはなしとのみ答ふとも其の後輟耕録を見るに
此事載りけり其文曰今人家正門適當巷陌橋道之衝立一小石
将軍或植一小石碑鐫其上曰石敢當云云 薩摩八日本の極南
南にありて唐土に近く殊に唐船の往来も自由なりしか
ば彼地まで唐の風のうつりたるにやと思ひ来りて此地に作り初し
事ぞ又田畠の中に石にて衣冠の像を彫りて所々の田
夫小間々に田の神なりとて是を彼の輟耕録に見へたる
石将軍の類にて田の神の衣冠の像に作りたるとの事也
俗にかくさまにえびすの像に作り石を将棊の駒の形に

作りて山林を彫刻て樹皇の出口あるを以てあり岸も紛るやら
あまりあまく見あたりのなり石敷廊を来る迄天際宮の牡丹
小背をあらしといひし人ありけるとなし

西遊記巻之一終

西杜